

## 薬用樹木「キハダ」について

### 1. はじめに

キハダ (*Phellodendron amurense*) は、ミカン科キハダ属の落葉高木でアジア北東部、日本では北海道から九州に分布します(写真1)。比較的成長が早い広葉樹で、20年で直径20cmを超えることもあります。鮮やかな黄色を呈する内樹皮には、抗菌・抗炎症の作用があるベルベリンが含まれます。内樹皮を乾燥させたものが生薬「オウバク」であり、胃炎や二日酔いに効果がある漢方薬に配合されています。また、長野県の「百草丸」、奈良県の「陀羅尼助丸(ダラニスケガン)」、鳥取県の「煉熊丸(ネリグマガン)」はキハダのエキスを丸く固めた丸薬であり、伝統的な民間薬として古くから使われています。これら伝統薬は山岳修験者の常備薬として愛用され、広められたとされています。



写真1 キハダ  
(福島県南会津町)

### 2. 国産オウバク

昭和40～60年代には主要産地である長野県だけでも40～80tが生産されていたとされていますが、平成26年度のオウバクの国内生産量は2.5t(国産率は1.3%)にまで激減し、現在では輸入品の全量が中国産となっています。キハダ生産は主に林業の副業として天然資源の採取により行われてきましたが、生産者の高齢化や減少、キハダの天然資源の減少や奥地化により国内生産が衰退したと考えられます。栽培も行われていますが、十分な生産が見込まれる規模ではないようです。このような中、北海道夕張市ではキハダの産地形成を目指し、キハダ植林を進めています。

キハダを生薬とする場合、日本薬局方により

主要成分であるベルベリンの含有率が決められており、また、製薬メーカーは独自の基準を設けているようです。ベルベリン含有率については寒冷地のキハダでは含有率が低くなる傾向があるとされています。ベルベリン含有率は成長とも関係し、樹齢が大きくなるに従い、これらに加え、同じ樹齢でもよく成長した個体ほどベルベリン含有率が高くなる傾向があります。国産オウバクは、エキス化した際に適度な粘性があり、丸剤に適しているとされています。

### 3. 多用途樹種であるキハダ

キハダは薬用以外にも用途の多い樹種です。内樹皮は鮮やかな黄色の天然染料として使われるとともに、材は美しい光沢を出し、家具や器具(写真2)などの用材になります。また、キハダは直径が1cmほどの大きさの果実を多数つけ、同じミカン科の山椒のような強い苦味を持ち、アイヌ民族では食用としていました。花は北海道で良質な蜂蜜の蜜源となっています。



写真2 キハダ材の湯のみ茶碗

### 4. 終わりに

このように成長が比較的早く、薬用として古くから利用され、他にも多くの用途があるキハダは、重要な森林資源であり、今後の利用拡大が期待されます。利用においては成長が早く、品質が優れる優良な個体の栽培が有利になります。そこで、優良な個体を組織培養によって増殖するための技術の開発に取り組んでいます。

(森林バイオ研究センター 谷口 亨)